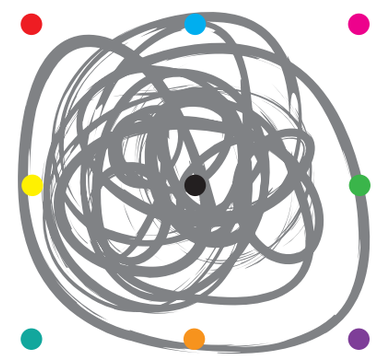
アーツでまなび アートでつなぐ！

まえばしアートスクール計画@群大 × アーツ前橋

プログラムガイド 2016



Learn and Connect with Art, in Maebashi !
“Maebashi Art School PLAN Project”

Implementation, evaluation and construction of human resource development programs for arts management with/using art museum and regional art projects

平成 28 年度 大学を活用した文化芸術推進事業
美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成プログラムの構築と実施・評価

会場：群馬大学荒牧キャンパス , アーツ前橋 , 前橋市中央公民館 (前橋プラザ元気 21 内 3Ｆ～5Ｆ)，広瀬川美術館
venues:Gunma University Aramaki Campus, Arts Maebashi, Maebashi Central Public Hall (Maebashi Plaza Genki 21) , Hirosegawa Museum

アーツでまなび アートでつなぐ！
まえばしアートスクール計画@群大 × アーツ前橋

平成 28 年度 大学を活用した文化芸術推進事業
美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成プログラムの構築と実施・評価

プログラムガイド 2016

目次

前橋アートスクール計画@群大 × アーツ前橋 2016 について：
茂木 一司……02

基礎講座 01〜08：　茂木 一司……03

集中講座 01〜12：　橋本 誠・熊谷 薫……04

実践講座 A コース：前橋メディアパフォーマンス
高山 明・林 立騎・田中 沙紀……05

実践講座 B コース：インクルーシブ × サスティナブル × クリエイティブな地域活動拠点づくりのマネジメント　坂倉 杏介・井尻 貴子……06
長津 結一郎

実践講座 C コース：まえばし未来アトリエ：インクルーシブ美術教育による社会実験：広瀬川美術館からの新しい発信！
茂木 一司・春原 史寛……07
手塚 千尋・木村 祐子

実践講座 D コース：鑑賞学習アプリ開発とインクルーシブなデザインアプローチ
山城 大督……08

受講生・スタッフインタビュー　……09

まえばしアートスクール計画について

前橋をインクルーシブで創造的なまちにするアートマネジメント講座の発進！

“現代はアートの時代だ”（R. シュタイナー）

この現代の多元的共生社会を覆う複雑な問題群はアートの力によってしか解決はできない！アートは私たちを拘束している既存の仕組みを批判し，はみ出す力を与えてくれる。同時に，アートの学びは，ばらばらになった思考や身体をつなぎ直し，全体性を恢復させ，私たちが今，ここにいるという確かな感覚を呼び起こす。

前橋をもっと創造性豊かでアートなまちに変えていきたい。名づけて「**まえばしアートスクール計画**」。学校のアート教育が衰退していく今，前橋のまちにアート教育の機能をもたせ，フォーマル教育（学校など）とインフォーマル教育（日常の学び）をアートでむすびながら，教育そのものをアート化していく。それは，前橋のまちのひと・もの・ことがアートで包摂され，アートから遠い人たちも巻き込んでいく，インクルーシブアート教育である。「アートスクール」には「アートの学校」の他に「アート派」という意味もある。私たちは「アート派」として，アートの多様性を活かして生きていく人を育てたい。「まえばしアートスクール計画」はアーツ前橋と群馬大学が中心になって，市内の学校，文化施設，高齢者介護・障害者施設，アーティストなどと連携しながら，子ども，高齢者，障害者，多文化などのアートから遠い人をアートで包摂していくプロジェクトである。私たちはアートの教育／学習を表現として発信していく，このプロジェクトを通して，地域コミュニティの問題と対峙できるアートマネジメント人材を育成していく。

社会に生きづらさが蔓延し，同時に生活感が失われ，わたしたちは箱（世界）の中で風船のようにふわふわと漂いながら，ぎゅうぎゅうと押しつぶされて生きています。狭いのでぶつからざるを得ないにもかかわらず，互いに自己主張ばかりしている。この状態は心地よいわけがありません。どうしたらもっと生きやすい社会を実現することができるのでしょうか？ひとつは自分たちがつくってきた狭い枠を再考し，どうしても一緒にいなければならない仲間たちと少し自由について考えてみることです。

そのためには、もう一度他者との対話が必要です。わたしたちは多くの違和感を抱きながらも，「他者理解と合意形成」を繰り返して，自分たちにあった社会の形をつくり続けなければならないのです。今，必要なのは「協同的な学び」を通して，対話し，摩擦や葛藤を経験し，たくさんの失敗をすること。つまり，大きなワークショップの学校＝アートスクール計画のような場が必要だということです。

ここでいうアートはけっしてむずかしいものではありません。わたしたちが日常生活の中で普通におこなっているあらゆることがらに関連する，いわば「生の身体技法」です。表現とコミュニケーション（＝アート）なしに人は生きてはいけません。アートには多様性を受容する力によって，決定的に他者を否定しないよさがあります。他者との違いを感じたとしても，アートによって問題解決を図るのならば，その違和感を持ち続ける地平にむしろ新しい創造の世界が広がります。「わかり合えない」（平田オリザ）ことをわかりながら，それでも続けていける学びがいま最も必要だと思うのです。

群馬大学はアーツ前橋と連携し，アートによって地域の中のひととひと，ひとともをつなぐことのできる，ひろい意味でのアートマネジメント（AM）ができる人材育成の事業を実施します。キーワードは，“インクルーシブマインド”。講座ではアート＝美術館から排除されがちな子ども，障害者，高齢者，異文化などを社会包摂できるプログラムづくりに挑戦し，理論と実践を往還しながら学びます。「与えられた文化の享受ではなく，アートによる対話を通して多文化共生をし，文化を発信できる市民の育成」。前橋をインクルーシブで持続可能なコミュニティに再生するために，ひと・もの・ことのさまざまな異種混交状態をていねいに機敏に，おもいやりを持ってつなぐことができるマインドとスキルをもつ人材が育つことを支援していきます。

この講座を受講して，アーティストと地域アートプロジェクト（AP）をいっしょにつくりながら，自分の可能性に挑戦してみませんか？修了後は自分の仕事はもちろん，アーツ前橋のサポーターとしての地域貢献など，つなぐ活動のキーパーソンとして活躍できます。ご参加お待ちしています。

総合ディレクター・群馬大学教授　茂木 一司

基礎講座・集中講座

基礎講座は実践講座のための基礎的な理論講座です。同時に，アーツ前橋の「アートスクール」(連続講演会）にもなっています。「アートとソーシャルインクルージョンの関係とは？」，「APのための地域リサーチの方法論とは？」，「APと学び」，「APの実際：食とアート，福祉とアート，映画とジェンダー，医療とアート」，「視覚障害者とアート」など。

集中講座はアートプロジェクト（AP）を学ぶために必須の「記録と評価」に特化した講座で，今年度特別に設けた講座です。APの特色は，最終的な成果が作品ではなく，制作プロセスの中で起こる出来事の豊かさを評価することで，記録と参加者のリフレクション（省察），編集作業を通した報告書作成などが総合評価として行われます。平成27年度の受講者はより深い記録・省察・（自己）評価の理論を実践講座を通して学ぶと同時に，平成28年度では4つの講座の受講者の横のつながりを重視するという目的もあります。この講座は一般社団法人ノマドプロダクション（橋本誠・熊谷薫）が企画運営します。

他に，「表現の森　協働としてのアート」展関連シンポジウム（特別講座，8.27-28予定），中間発表会，最終報告会も実施します。

○基礎講座

5.14 (sat)

○講座1：「アートプロジェクトにおける地域研究の重要性」山田 創平（京都精華大学人文学部総合人文学科長・准教授）

○講座2：「地域に根ざしたアートプロジェクトの実践とそのマネジメント」
雨宮　信（大阪市立大学文学部 特任講師／Breaker Project）（氏名はすべて敬称略，以下同様）

5.15 (sun)

○講座3「アートプロジェクトと学び」
「美術館 × アートプロジェクトの中の学び：東京都現代美術館の実践などを例にして」
郷　泰典（東京都現代美術館学芸員）
「アートプロジェクトの中の学び：アートと社会・地域をつなげるエンゲージメントとエデュケーション」
菊池 宏子（コミュニティデザイナー／アーティスト）

6.19 (sun)

○講座4：食とアート（アートプロジェクトの実際）
「フードスケープ（食風景）のデッサン：〈食べもの〉と〈食べものではないもの〉のあわいに生きるということ」森岡 祥倫（東京造形大学教授）
「食はアートになりえるか？コミュニケーションツールとしてのフードを考える」中山 晴奈（アーティスト／NPO法人フードデザイナーズネットワーク理事長）

7.16 (sat)

○講座5：福祉とアート
「アトリエ インカーブのアートマネジメント：アートと福祉の間で起こっていること」今中 博之・三宅 優子（アトリエ インカーブ）
「境界は揺らいでいるのか～グローバリゼーションと障がい者の創作活動」服部　正（甲南大学文学部准教授）

9.22 (thu)

○講座6：映画とジェンダー
映画『トークバック　沈黙をやぶる女たち』（坂上香監督作品）鑑賞。その後，トークバック！
「〈わたしはいかに沈黙を破れるか？〉女たちの演劇からの問いかけ」坂上　香（映画監督）
「上映者として見えてくるジェンダー『トークバック』を中心に」志尾 睦子（NPO法人たかさきコミュニティシネマ代表理事／シネマテークたかさき総支配人／高崎映画祭プロデューサー）

11.13 (sun)

○講座7：医療とアート
「やさしい美術―医療福祉との協働によるアートプロジェクトの可能性―」髙橋 伸行（アーティスト／やさしい美術プロジェクトディレクター）
「創造的なコミュニティを育てるマネジメントのコツ～病院の事例を参考に～」山口 悦子（大阪市立大学大学院医学研究科医療安全管理学准教授／大阪市立大学医学部付属病院医療安全管理部副部長）

1.24 (sun)

○講座8：見えない人からみた世界から考えるインクルージョン（仮）
伊藤 亜紗（東京工業大学准教授），ほか

○集中講座

5.14 (sat)

○講座1：ガイダンス／アートプロジェクトを「伝える」「残す」ために
茂木 一司（群馬大学教授）・橋本 誠・熊谷 薫
・集中講座のねらいや進め方，アートプロジェクトにおける「広報・記録・アーカイブ・評価」の重要性を理解する概論，実践講座で活用できる記録ツールの紹介などを行います。

5.15 (sun)

○講座2：「アートとの出逢いを作る仕事　広報」
鈴木 潤子（@J(アットジェイ)ディレクター）・橋本・熊谷
・アートプロジェクトの魅力をどのような方に向けて伝えることができるのか。その様々な考え方と具体的な手法について，実例を通して学びます。

6.5 (sun)

○講座3：アートプロジェクトの実践と記録術①
石幡　愛（としまアートステーション構想事務局長／一般社団法人オノコロ）・橋本・熊谷
・アートプロジェクトの実践サイクルとそのプロセスを残したり，伝えたりするための仕組みづくりについて学びます。

6.19 (sun)

○講座4：アートプロジェクトの実践と記録術②
須藤 崇規（映像エンジニア／ディレクター）・橋本・熊谷
・デジタルカメラやスマートフォンなど，アートプロジェクトの現場で身近なツールを効果的に活用するコツなどについて学びます。

7.3 (sun)

○講座5：アートプロジェクトの価値を伝える取材・編集術：友川 綾子（アートライター／編集者）
・アートプロジェクトの価値を引き出し広く伝える際や，効果的なアプローチや，広報ツールを制作する際に押さえておくべきポイントについて学びます。

8.7 (sun)

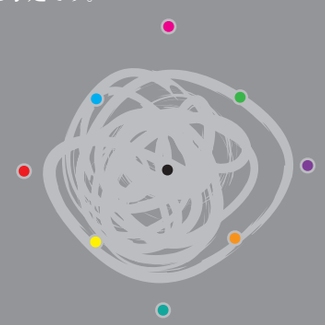
○講座6：実践コース 報告と実務のワークショップ①
橋本 誠・熊谷 薫
・実践講座受講生による講座1～5の学びをどのように現場に生かしているかの状況報告を元にした実務ワークショップを行い，今後の取り組みについてチューニングします。

8.27 (sat) ~28 (sun)

【特別講座】「表現の森　協働としてのアート」展シンポジウム，アーツ前橋
・同展の出品作家及びゲストコメンテーターによるプロジェクトの報告と検証の2日間

9.4 (sun)
9.25 (sun)
10.16 (sun)
11.13 (sun)
12.4 (sun)
1.22 (sun)

以下のプログラムは，実践講座の展開や受講生の習熟状況に合わせて内容や講師を決定します。講座の開講回数も予定です。



※講座の実施日時，講師，内容は急な変更でありますのでご了承ください。講座では写真やビデオ撮影いたしますので，ご了解の上でご参加ください。

基礎講座講師

山田　創平（やまだそうへい）（敬称略，以下同様）
京都精華大学人文学部総合人文学科長・准教授
1974年群馬県生まれ。名古屋大学大学院博士課程修了。博士（文学）。専門は社会学（言説理論を用いた地域研究，人権研究）。厚生労働省所管の研究機関や民間のシンクタンクを経て現職。近年は国内外のさまざまなアートプロジェクトでリサーチやコンセプトデザインに関わり，自らもインスタレーションやパフォーマンス，舞台作品の制作を行っている。編著書に『たたかうLGBT&アート』（法律文化社，2016年）ほか。

郷　泰典（ごうやすのり）
東京都現代美術館 事業推進課 教育普及係長 学芸員
ギャラリー，出版社勤務等を経て，1998年よりフリーのワークショップ・プランナーとして活動。作品と鑑賞者とをつなぎ，日常生活におけるアート体験へと導く，主に子どもを対象としたワークショップ・プログラムを企画し，全国各地の美術館・学校・病院などで実施。2007年より東京都現代美術館教育普及係長・学芸員。鑑賞プログラム，ワークショップ等多数企画実施。担当企画展覧会「オバケとパンツとお星さま―こどもが，こどもで，いられる場所」（2013年）。

Photo: Martin Zeller

中山　晴奈（なかやまはるな）
アーティスト
1980年千葉県生まれ。筑波大学，東京芸術大学大学院修了。美術館でのワークショップやパーティーのスタイリングをはじめ，日本各地で商品開発などの食を通じたコミュニケーションデザインを行う。慶應義塾大学SFC上席所員，NPO法人フードデザイナーズネットワーク理事長。みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2016参加アーティスト。2014～2015年，ポート・ジャーニー・プロジェクト，バーゼルと横浜のレジデンスアーティスト，ほか多数。

今中　博之（いまなかひろし）
社会福祉法人 素王会理事長。アトリエ インカーブ クリエイティブディレクター。イマナカデザイン一級建築士事務所代表。一級建築士。先天性下肢障がい。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会エンブレム委員，文化・教育委員。厚生労働省・文化庁「障害者の芸術振興に関する懇談会」構成員。（株）乃村工藝社デザイン部を経て，アトリエインカーブを設立。知的に障がいがあるアーティストの作品を世界に発信している。賞歴：Gマーク等。著書：『観点変更』（創元社）等。アトリエ インカーブ http://incurve.jp

服部　正（はっとりただし）
甲南大学准教授・芸術学・美術史
兵庫県出身。大阪大学大学院博士課程単位取得退学。兵庫県立美術館（1995～2012年），横尾忠則現代美術館（2012～2013年）学芸員を経て，2013年4月より現職。アウトサイダー・アート，アール・ブリュットなどと呼ばれる独学自修の芸術家や障がい者の創作活動についての研究や展覧会企画を行っている。著書に，『アウトサイダー・アート』（光文社新書，2003年），『解剖と変容』（共著，現代企画室，2012年），『山下清と昭和の美術』（共著，名古屋大学出版会，2014年）など。

志尾　睦子（しおむつこ）
NPO法人たかさきコミュニティシネマ代表理事，シネマテークたかさき総支配人，高崎映画祭プロデューサー。群馬県立女子大学文学部美学美術史学科卒業。在学中に高崎映画祭事務局のボランティアスタッフとなる。2004年からディレクター，2009年より全体を統括する。2004年，NPO法人たかさきコミュニティシネマを設立し，シネマテークたかさきを開館。現在は，高崎電気館の運営管理，高崎フィルム・コミッション事業にも携わる。

山口　悦子（やまぐちえつこ）
大阪市立大学大学院医学研究科医療安全管理学准教授
大阪市立大学医学部付属病院医療安全管理部副部長
専門：患者安全学，小児血液腫瘍学，グループ・ダイナミックス
神奈川県生まれ。大阪市立大学大学院医学研究科・大阪大学大学院人間科学研究科終了。博士（医学，人間科学）。2009年より医療安全管理部に着任，現在に至る。研究テーマは，病院組織の学習と発達。医療安全管理業務に携わりながら，医療の質・安全に資するアート&デザインのあり方についても研究している。著書『病院とアート』（編者），『越境する対話と学び』（共著，第4章担当）など。

雨森　信（あめのもりのぶ）
大阪市立大学文学部特任講師／成安造形大学客員准教授，Breaker Projectディレクター。大阪生まれ。京都市立芸術大学美術学部工芸科卒業。2003年より大阪市文化事業として「Breaker Project」を企画・運営。既存の美術空間やシステムにはおさまりきらない独自の表現活動を開拓するアーティストとともに，新たな表現領域を探求する。地域に根ざしたAPを長期的に実践していくことで，現代における「芸術と社会の有効な関係」とアートマネジメントの役割について再考する。

菊池　宏子（きくちひろこ）
アーティスト/NPO法人インビジブルクリエイティブディレクタ。東京生まれ。ボストン大学芸術学部彫刻科卒，米国タフツ大学大学院博士前期課程修了。MITリストビジュアルアーツセンターやボストン美術館などで，エデュケーション・プログラム・ワークショップ開発・リーダーシップ育成，コミュニティ・エンゲージメント戦略・開発，アートや文化の役割・機能を生かした地域再生事業など多数携さわる。2011年，東日本大震災を機に東京に戻る。わわプロジェクト，あいちトリエンナーレ2013・教育普及事業統括などで従事。福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会など，アートを使った教育関連の共同プロジェクトを多数企画。武蔵野美術大学，立教大学兼任講師なども務める。

森岡　祥倫（もりおかよしとも）
東京造形大学教授・芸術と科学技術の相関史研究
1952年生。筑波大学芸術研究科修士課程修了。出版社・映像制作会社勤務を経て自治体・企業等の文化事業に関わる一方，美術・文芸誌等で評論活動を行う。東京工芸大学，大阪成蹊大学などを経て現職。共著に『アートと社会のえんむすび 1996-2000』『情報の宇宙と変容する表現』他。近年は食環境の変容をエコロジーやポストモダニズム美学の視点から捉える調査研究を行っている。

三宅　優子（みやけゆうこ）
社会福祉法人 素王会 アトリエ インカーブ チーフ。
金沢美術工芸大学デザイン学部視覚デザイン科を卒業後，2007年よりアトリエ インカーブのスタッフとして勤務。所属する知的に障がいがあるアーティストたちの創作活動をサポートしている。2010年に開廊した「ギャラリー インカーブ｜京都」（アトリエ インカーブ専属のコマーシャルギャラリー）の立ち上げに携わり，主に作品の管理や国内外のアートフェア業務などを担当。社会福祉士，学芸員の資格を有する。アトリエ インカーブ http://incurve.jp

坂上　香（さかがみかおり）
ドキュメンタリー映画監督／NPO法人out of frame代表。一橋大学客員准教授。TVディレクターと大学専任教員を各々9年間務めた後，独立して映像制作を再開。2007年以降は，深刻な暴力の影響を受けた女性や子ども，受刑者らとの協働的表現活動も行い，彼／彼女たちと社会との接点づくりを模索。『Lifers ライファーズ　終身刑を超えて』（2004），『トークバック　沈黙を破る女たち』（2013）に引き続き，国内の男性刑務所を舞台にした映画を制作中。主な著書『ライファーズ　罪に向きあう』（みすず書房）。outofframe.org

髙橋　伸行（たかはしのぶゆき）
アーティスト／やさしい美術プロジェクトディレクター
愛知生まれ。愛知県立芸術大学大学院彫刻科修了。2002年にやさしい美術プロジェクトを設立。療養型，急性期病院のほか，緩和ケア病棟や老人福祉施設などでアートプロジェクトを展開する。瀬戸内国際芸術祭では，国立（ハンセン病）療養所大島青松園にてガイドツアーとカフェ，ギャラリーが連携する取り組み〔つながりの家〕を実施し，2013年度グッドデザイン賞受賞。

伊藤　亜紗（いとうあさ）
東京工業大学リベラルアーツセンター准教授・同大学院社会理工学研究科准教授。
1979年生。美学者。現代アートおよび身体について研究するかたわら，雑誌の編集や小説の執筆にも携わる。近年は小林耕平さんの作品に参加。最新作は『ソ・ン・ビ・タ・ウ・ン』（2013）。著書に『ヴァレリーの芸術哲学，あるいは身体の解剖』（水声社）。『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（光文社，2015）。参加作品に小林耕平《タ・イ・ム・マ・シ・ン》（国立近代美術館）など。

集中講座講師

橋本　誠（はしもとまこと）
アートプロデューサー／一般社団法人ノマドプロダクション代表理事
1981年東京都生まれ・在住。横浜国立大学教育人間科学部卒業。東京文化発信プロジェクト室（現・アーツカウンシル東京）で「東京アートポイント計画」（2009～）の立ち上げに携わる。TARL（Tokyo Art Research Lab）事務局長（2012～）。主な企画に「生活と表現」（東京/2015～），「KOTOBUKIクリエイティブアクション」（横浜/2008～）。共著に『現代アートの本当の学び方』（フィルムアート/2014）など。

鈴木　潤子（すずきじゅんこ）
@J(アットジェイ)ディレクター
1969年東京生まれ。時事通信社を経て，日本科学未来館，森美術館などで広報などコミュニケーション全般を統括・担当する。2010年に独立。東京2020オリンピック・パラリンピック招致員会評議会アドバイザー，あいちトリエンナーレ2013 PRオフィサーなどを務めた。また，2010年から株式会社良品計画Open MUJI Tokyo（旧ATELIER MUJI）のシニア・キュレーターとして，数多くの企画展を開催。「ファッションは更新できるのか，会議」（2015）など。

須藤　崇規（すどうたかき）
映像エンジニア／ディレクター
1983年北海道生まれ。東京藝大学音楽研究科芸術環境創造専攻修士課程修了。舞台映像のデザイン，記録映像の監督など舞台芸術に関わる映像全般を手がける。主な映像プラン作品に，チェルフィッチュ『わたしは彼女に何もしてあげられない』，マームとジプシー＊急な坂スタジオ『歩行と移動』など。監督作品『ほうほう堂@留守番』，チェルフィッチュ『現在地』『地面と床』はDVDで発売中。愛知大学非常勤講師。

熊谷　薫（くまがいかおる）
デジタルアーカイブ・コーディネーター/アートマネージャー
1979年川崎市生まれ。東京大学美術史学科修士課程修了後，NYの市立大学に留学し戦後美術について研究，グッゲンハイム美術館でのインターンを経て帰国。東京文化発信プロジェクト室東京アートポイント計画プログラムオフィサーとして，アートプロジェクトの記録調査／アーカイヴ／評価の一連の手法開発を試みた（2012）。現在アートプロジェクトなどの活動体へ，アーカイヴや評価プロジェクトのコーディネートと普及業務に従事している。

Photo:©427FOTO

石幡　愛（いしはたあい）
一般社団法人オノコロ／としまアートステーション構想事務局長
1984年福島県生まれ。東京大学大学院教育学研究科修士課程修了。同研究科博士課程退学。教育学修士。NPO法人クリエイティブサポートレッツ事務局を経て，現職。アートプロジェクトの評価，特に参加型評価やエンパワメント評価に関心を持ち，プロジェクトのプロセスそのものに評価的な視点や手法を埋め込む方法を探っている。

友川　綾子（ともかわあやこ）
アートライター／編集者
1979年生まれ。アートギャラリー勤務や3331 Arts Chiyoda設立時のPRスタッフを経て2010年より，フリーランスに。各種メディアで編集・執筆活動を行うほか，アートプロジェクトのマネジメントを手がける。2016年5月から徳島県神山町に拠点を移し，住人と役場が策定した地方創生戦略を実現する活動母体一般社団法人神山つなぐ公社でPRを担当する。主な執筆媒体に『美術手帖』，『CINRA.NET』，『bitecho』など。

運営側講師

茂木　一司（もぎかずじ）
群馬大学教育学部教授／NPO法人WSD推進機構理事長
専門：美術科教育，ワークショップ学習論，インクルーシブ美術教育。
群馬生まれ。筑波大学大学院芸術研究科修了。九州芸術工科大学大学院博士後期課程芸術工学研究科情報伝達専攻修了。博士（芸術工学）。鹿児島大学教育学部助教授を経て，現職。ワークショップ学習論からインクルーシブ美術教育を研究中。著書に，『協同と表現のワークショップ』（代表編集），ワークショップと学び2』（共著），『色のまなび事典』（3巻，共編書）ほか。

住友　文彦（すみともふみひこ）
アーツ前橋館長／東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授
1971年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科修了。あいちトリエンナーレ2013，メディア・シティ・ソウル2010（ソウル市美術館）の共同キュレーター。NPO法人アーツインシアティヴトウキョウ(AIT)創立メンバー。展覧会＝「Possible　Futures：アート&テクノロジー過去と未来」展（ICC，東京，2005），「川俣正［通路］」（東京都現代美術館，東京，2008），ヨコハマ国際映像祭2009ほか。共著＝『キュレーターになる！』ほか。

実践講座・A コース

○講座概要

土地の記憶をリサーチすることで，新たな表現やコミュニケーションを生み出す現代アートの手法を学びながら，地域アートプロジェクトの可能性をアーティストと共に考えます。PortB は，社会が内包する問題を映像メディアなどを通じて，市民参加型，移動型の新しい形の演劇を提案してきました。

本講座では，前橋市内でインドシナ難民を長年受け入れてきた施設「あかつきの村」を中心に，社会における共同体の形成の歴史を調査します。受講生はアーティストのリサーチに同行しながら，日本における社会的マイノリティの問題を深め，アーティスト独自の社会へのアプローチを学んでいきます。

A コースは，アーツ前橋で今夏開催される「表現の森 協働としてのアート」展と連動する形で開催されます。高山明が，前橋市内の「あかつきの村」などの施設を調査することで，レクチャー，トーク，朗読などによる新たな「教育劇」の制作，上演を目指します。

※講師，内容は変更がありますのでご了承ください。講座では写真やビデオ撮影いたしますので，ご了解の上でご参加ください。

4	◇第 1 回　地域リサーチ (前橋市内) 高山 明・林 立騎・田中 沙季 (PortB) ◇第 2 回　地域リサーチ (前橋・あかつきの村) 高山 明・林 立騎・田中 沙季 (PortB)
5	○講座 1 ：地域とローカルメディアのリサーチ① ・移民，難民，宗教，言語，共同体，社会の内／外といったテーマに沿って地域をリサーチすると同時に，それを美術館とローカルメディアで「上演」するための形式を検討する。理論的にはブレヒトの「教育劇」を批判的に参照し，地域の現実と芸術の歴史性の交差する表現を探る。 高山 明・林 立騎・田中 沙季 (PortB)
6	○講座 2：地域とローカルメディアのリサーチ② ・地域のリサーチを深めるとともに，ローカルメディアとの協力関係を築き，美術館とメディアでの「上演」のかたちを検討する。各メディアの特性に沿って「上演」の形態を模索し，美術館を含む複数のメディアを通じて土地と歴史を多角的に捉え直す枠組みを構想する。 高山 明・林 立騎・田中 沙季 (PortB)・猪股 剛・小野 正嗣
7	○講座 3：「教育劇」制作 ・「教える」劇ではなく，問いを投げかけ，考える機会となり，参加者が自分自身にとっての「教え」を得る意味での「教育劇」を制作すべく，リサーチを進め，各メディアとの調整を行う。 高山 明・林 立騎・田中 沙季 (PortB)，ほか ○講座 4：「教育劇」上演① ・一晩で終わる「劇」ではなく，より長く続く「上演」をスタートさせる。レクチャー，トーク，シンポジウム，朗読，ツアー，食事会など，どのようなかたちになるかはリサーチのプロセスに委ねられている。美術館のリアルな場とローカルメディアの言葉，音声，映像が互いに互いを照らし合う「上演」が生まれる。 高山 明・林 立騎・田中 沙季 (PortB)，ほか
8	○講座 5：「教育劇」上演② ・「教育劇」の上演が続く。その形態はプロセスに委ねられる。美術館の来場者とローカルメディアの受容者が，プロジェクトの断片だけでも楽しめると同時に，全てを一つの作品としても体験できるような「上演」が目指される。 高山 明・林 立騎・田中 沙季 (PortB)，ほか ○講座 6：「教育劇」上演③ ・「教育劇」の上演が続く。上演はリサーチに対して結論をもたらすのではなく，開かれた問いと，土地と歴史に対する別の見方を浮かび上がらせる。それと同時に，美術館，新聞，テレビ，ラジオなど，各メディアの特性を再認識する機会ともなる。 高山 明・林 立騎・田中 沙季 (PortB)，ほか
9	○講座 7：ドキュメント制作 ・リサーチと「教育劇」上演のプロセスをドキュメント化することにより，プロジェクトの中にあった可能性を拾い直し，今後の多様な展開に向けてふたたび開かれたプラットフォーム／出発点をつくる。 高山 明・林 立騎・田中 沙季 (PortB)，ほか

Port B(ポルト・ビー)

2002年東京にて結成。高山明を中心にプロジェクトごとに形を変えて作られる創作ユニット。実際の都市を使ったインスタレーション, ツアー・パフォーマンス, 社会実験的プロジェクト, 言論イベント, 観光ツアーなど, 多岐にわたる活動を展開している。いずれの活動においても「演劇とは何か」という問いが根底にあり, 演劇の可能性を拡張し, 社会に接続する方法を追求している。

Port観光リサーチセンター

高山明を中心に国内外で活動する演劇ユニットPort Bから発展したリサーチ・ユニット。プロジェクトに応じて, リサーチャー, 編集者, プロデューサー, デザイナー, プログラマーなど専門スキルを持ったメンバーで構成される。Port Bでの演劇実践を経て培われた「演劇的思考」をリサーチ手法に応用し, 都市に蓄積された膨大な歴史や事象, 情報を独自の視点でサーベイし, その成果を再編集し発表する。2013年より一般社団法人として法人化。

高山　明(たかやまあきら)
東京藝術大学大学院映像研究科准教授。
1969年生まれ。Port B主宰。既存の演劇の枠組を超えた作品都を発表。観客論を軸に据え, 現実の都市や社会に「演劇＝客席」を拡張していく手法により, 演劇のアーキテクチャを更新し, 社会のなかに新たなプラットフォームを作ることを試みている。観光, 建築, 様々なメディアといった異分野とのコラボレーションに活動の領域を拡げ, 演劇的発想・思考によって様々なジャンルでの可能性の開拓に取り組んでいる。

林　立騎(はやしたつき)
翻訳者, 演劇研究者。一般社団法人Port観光リサーチセンター所長。東京藝術大学特任講師(geidaiRAM), 京都造形芸術大学非常勤講師。NPO法人芸術公社ディレクター・コレクティブ, 港区文化芸術サポート事業評価員。訳書にイェリネク『光のない。』(第5回小田島雄志翻訳戯曲賞), 共編著に『Die Evakuierung des Theaters』

田中 沙季(たなかさき)
舞台制作会社CSB勤務後, 2009年よりPort Bによるプロジェクトに, 制作・インタビュアー・リサーチャーとして参加。芸術作品と現実の都市や社会のあいだのリサーチを軸に活動。一般社団法人Port観光リサーチセンター研究員。一般社団法人日本パフォーマンス／アート研究所メンバー。株式会社感電社が発行するブルーズマガジンにて外国人労働者を紹介するコーナーを担当中。

その他の講師：
猪股　剛(臨床心理士)
大岡 寛典(デザイナー)
柴原 聡子(編集者)
小野 正嗣(小説家)など。
※講師は予定です。

実践講座・B コース

○講座概要

アートによるまちづくりには，多様性を活かし，対話を通して場づくりができる人材が欠かせません。コミュニティ研究，インクルーシブな場づくりを実践する坂倉杏介 (東京都市大学)，NPO 法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所とともに，講座を運営します。

まちには，すでに多様な人々が暮らしています。こども，学生，会社員，商店主，主婦，母親，父親，おじいさん，おばあさん・・・そうしたひとり一人が自らの力を活かし，いきいきと暮らしていくために，まちにはどのような「場」が必要なのか。前橋のまちなかをフィールドに，レクチャーと対話，合宿や実践形式のワークショップをとおして，「多様な人が集い，つながりと活動を生み出す場づくり」を考えます。

①レクチャーと対話をとおして考える対話ゼミ（3 回，6〜7 月)，②まちづくりの現場を視察し学ぶ合宿 1 回（8 月)，③レクチャーとワークをとおし，アイディアをまとめて発表する実践ゼミ 4 回 (9〜12 月) があります。(実施時期は予定)

※講師，内容は変更がありますのでご了承ください。講座では写真やビデオ撮影いたしますので，ご了解の上でご参加ください。

4 5	◇第 1.2 回　地域リサーチ (前橋市中心地区) 坂倉 杏介 (東京都市大学)，ほか ・前橋中心地区で活動する若者などを参加者にして，講座参加者を集め，最初のリサーチを実施します。
6.25 (sat)	○講座 1：対話ゼミ：「まちでコミュニティスペースを運営する」(150 分) 岩中 可奈子(シバウラハウス) × 加藤 亮子(芝の家)，【進行】坂倉 杏介 (東京都市大学)，井尻 貴子 (多様性と境界に関する対話と表現の研究所)
7.9 (sat)	○講座 2：対話ゼミ：「地域の人の力を生かしたアート活動」(150 分) 小山田 徹（美術家／京都市立芸術大学）× 吉川 由美(アートディレクター／演出家) 【進行】坂倉 杏介 (東京都市大学)，井尻 貴子 (多様性と境界に関する対話と表現の研究所)
7.23 (sat)	○講座 3：対話ゼミ：「まちなかの多様な「働く」を考える」(150 分) 井上 拓磨（Hana Lab.）× 国保 祥子（静岡県立大学） 【進行】坂倉 杏介 (東京都市大学)，井尻 貴子 (多様性と境界に関する対話と表現の研究所)
8	○合宿：〈サマースクール〉まちづくり (インクルーシブな場づくり) の現場の視察と体験から，場づくりを学びます 開講日：8 月，2~3 日間，1 回開講（日程は調整中） 坂倉 杏介 (東京都市大学)，長津 結一郎 (九州大学，多様性と境界に関する対話と表現の研究所)，井尻 貴子 (同)，熊倉 敬聡
9.11 (sun) 10.16 (sun) 11.20 (sun) 12.18 (sun)	○実践ゼミ 1〜4 ：<拠点をつくろう>(300 分) 地域アートプロジェクトの実践 （1）武山 政直先生と考える，使う人がつくる場所(ペルソナ設定と場のストーリーボードづくり) （2）遠藤 幹子さんと考える , 人の創造力の生きる場所(多様な想いを聞きあい，拠点の方向性を話し合う) （3）宮崎 晃吉さんと考える，つながるアクションの起こし方（ステークホルダーマップなどから拠点のイメージを考える) （4）稲庭 彩和子さんと考える，人のつながるコトづくり (プログラムやコミュニケーションデザインを考える) ・前橋のまちなかをフィールドに「多様な人が集い , つながりと活動を生み出す場づくり」について具体的に考えます。場づくり・まちづくりなどの専門家を講師に迎え，4 回の講座とワークをとおしてアイディアをまとめ，発表します。 【進行】坂倉 杏介 (東京都市大学)，井尻 貴子 (多様性と境界に関する対話と表現の研究所)

坂倉 杏介(さかくらきょうすけ)
東京都市大学都市生活学部准教授
慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。同グローバルセキュリティ研究所特任講師を経て現職。『芝の家』や「ご近所イノベーション学校」の運営など, コミュニティの形成過程やワークショップの体験デザインを実践的に研究。三田の家LLP代表。NPO法人エイブル・アート・ジャパン理事, NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所副代表理事。

井尻 貴子(いじりたかこ)
NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所事務局長
早稲田大学第一文学部(美術史)卒業, 大阪大学大学院文学研究科(臨床哲学)博士前期課程修了。財団法人たんぽぽの家, 公益財団法人東京都歴史文化財団東京文化発信プロジェクト室等を経て, 現職。同時に, フリーランスとして主にアート, 哲学に関わるプロジェクト等の企画, 運営, コーディネート, 記録編集などを行っている。共著書に,『哲学カフェのひらきかた』,『病院とアート―医療現場の再生と未来』など。

長津 結一郎(ながつゆういちろう)
九州大学助教／NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所代表理事
1985年北海道生まれ, 東京藝術大学大学院修了。専門はアート・マネジメント, 社会包摂。障害者の表現活動をはじめとした社会包摂的な芸術活動を主たる研究対象とし, 異なる立場や背景をもつ人々の協働することができるのか, 研究／実践の双方からのアプローチを試みている。主な活動に「東京迂回路研究」がある。

その他の講師：
【対話ゼミ】
岩中 可奈子(シバウラハウス)
加藤 亮子(芝の家)
小山田 徹(美術家／京都市立芸術大学教授)
吉川 由美(アートディレクター／演出家)
井上 拓磨(hana Lab.)
国保 祥子(静岡県立大学)
【合宿】
熊倉 敬聡
【実践ゼミ】
竹丸 草子(ワークショップデザイナー)
遠藤 幹子(一般社団法人マザー・アーキテクチュア代表理事)
武山 政直(慶應義塾大学経済学部教授)
宮崎 晃吉(建築家／HAGISO代表)
稲庭 彩和子(東京都美術館), など。
※講師は予定です。

実践講座・Cコース

○講座概要

Cコースは，戦後初期より展示や子どもアトリエ・工作教室を実践してきた広瀬川美術館を活動拠点として再生し，前橋市民が持つ同館の豊かなイメージを引き継ぎ，自由な表現者としての「子どもが／とつくるアートプロジェクト(AP)」をテーマに，障害児を含む子どもワークショップなどを実践します。講座がインクルーシブな場となるために，障害者・高齢者福祉の創造的活動なども混交し，活動全体を「まえばし未来アトリエ」事業として構築します。受講生は子ども，障害者，高齢者などを含むインクルーシブアートWS（出前ワークショップやアート交流キャンプなどを含む），展覧会づくりなどを中心にアートマネジメントのマインド・スキルを学びます。①はみだしアートワークショップ：子ども・障害者・高齢者などのためのインクルーシブアートワークショップ，②はみだしアート・展覧会づくり学習，③まえばしアートスクール計画研究会（まえばしインクルーシブ美術教育連絡協議会），④インクルーシブアートカフェ，の４つの事業を企画運営していきます。※事業はNPOまえばしプロジェクトが支援します。

※講師，内容は変更でありますのでご了承ください。講座では写真やビデオ撮影いたしますので，ご了解の上でご参加ください。

4 5	○講座１：まえばし未来アトリエ・オープニングパーティをつくる ○インクルーシブアートカフェ	
6	○講座２：ワークショップの実施と展覧会準備：まえばしプロジェクト＋外部講師 ○まえばしアートスクール計画研究会 ○インクルーシブアートカフェ	
7	○講座３：ワークショップの実施と展覧会準備：まえばしプロジェクト＋外部講師 ○まえばしアートスクール計画研究会 ○インクルーシブアートカフェ	
8	○講座４：ワークショップの実施と展覧会準備：まえばしプロジェクト＋外部講師 ○まえばしアートスクール計画研究会 ○インクルーシブアートカフェ	展覧会①
9	○講座５：ワークショップの実施と展覧会準備：まえばしプロジェクト＋外部講師 ○まえばしアートスクール計画研究会 ○インクルーシブアートカフェ	展覧会②
10	○講座６：ワークショップの実施と展覧会準備：まえばしプロジェクト＋外部講師 ○まえばしアートスクール計画研究会 ○インクルーシブアートカフェ	
11	○講座７：ワークショップの実施と展覧会準備：まえばしプロジェクト＋外部講師 ○まえばしアートスクール計画研究会 ○インクルーシブアートカフェ	
12	○講座８：ワークショップの実施と展覧会準備：まえばしプロジェクト＋外部講師 ○まえばしアートスクール計画研究会 ○インクルーシブアートカフェ	
1	○講座９：ワークショップの実施と展覧会準備：まえばしプロジェクト＋外部講師 ○まえばしアートスクール計画研究会	展覧会③

特定非営利法人まえばしプロジェクト

2016年前橋にて結成。茂木一司(群馬大学教授)を中心にアート×教育／学習×(ソーシャル)インクルージョンを社会実験的プロジェクトとして展開する。「現代はアートの時代だ。アートによって，ものごとを解決する時代だ」(R.シュタイナー)のことばを実践するために，アートを生きるための身体的技法と捉え，フォーマル(学校など)とインフォーマルの学びを架橋・越境し，子ども，障害者・高齢者，異文化，など多様な背景を持つ人々が協働・協同で学ぶインクルーシブ美術教育の現場をつくりだし，創造性豊かなひと・もの・ことづくりを通して，新しい社会の価値観を提案していく。

茂木 一司(もぎかずじ)
群馬大学教育学部教授／NPO法人WSD推進機構理事長，NPO法人まえばしプロジェクト。専門は美術科教育，ワークショップ学習論。群馬県生まれ。筑波大学大学院芸術研究科修了。九州芸術工科大学大学院博士後期課程芸術工学研究科情報伝達専攻修了。博士(芸術工学)。鹿児島大学教育学部助教授を経て，現職。インクルーシブ美術教育を研究中。著書に，『協同と表現のワークショップ』(代表編集)，『ワークショップと学び2』(共著)，『色のまなび事典』(3巻、共編書)ほか。

春原 史寛(すのはらふみひろ)
群馬大学教育学部准教授／NPO法人まえばしプロジェクト。専門は近代日本美術史(岡本太郎研究、美術の受容史)。長野県生まれ。筑波大学大学院人間総合科学研究科修了。博士(芸術学)。大川美術館学芸員，山梨県立美術館学芸員，山梨県立博物館学芸員を経て2013年から現職。美術館では展覧会企画のほか，ワークショップなどの教育普及も担当。担当展「浅川伯教・巧兄弟の心と目―朝鮮時代の美」(2011年)ほか。

手塚 千尋(てつかちひろ)
東京福祉大学短期大学部専任講師／NPO法人まえばしプロジェクト。群馬大学大学院教育学研究科修了。兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科修了。博士(学校教育学)。アートによる協同的な学びの学習環境デザインの研究をはじめる。即興的に生まれるアートならではのコラボレーションや集団で創造性を発揮する経験を学習科学の視点から明らかにする研究に取り組む。著書に，『協同と表現のワークショップ 』(共著)，『色のまなび事典』(編集)ほか。

木村 祐子(きむらゆうこ)
前橋市地域包括支援センター永明勤務／NPO法人まえばしプロジェクト。山口県生まれ。信州大学医学部保健学科卒業，群馬大学大学院教育学研究科修了。子ども病院で周産期医療や重症心身障害児における看護師勤務を経て，看護理論やケア論を元に美術教育学を学ぶ。現在は高齢者の在宅支援として保健師勤務。ほかに知的障害者や発展途上国子どもの表現活動などを研究中。

○展覧会と関連イベント

展覧会①:「まえばしアートスクール計画：わたしのアートエデュケーション展」(7月26日(火)～8月7日(日))
・7月31日(日) シンポジウム「ラ・ボンヌと生活造型実験室」染谷滋(元富岡市立美術博物館館長)，茂木一司，春原史寛

展覧会②:「とがびアートプロジェクト展」
(9月13日(火)～25日(日))
・シンポジウムもしくは講演会を実施

展覧会③:「インクルーシブアート展@ぐんま展」
(2017年1月10日(火)～22日(日))
・シンポジウムもしくは講演会を実施

※名称・日程は仮称・予定です。

実践講座・Dコース

○講座概要

鑑賞は表現・制作と表裏一体の活動であり，つくることが苦手でもアートや美術館を楽しむ方法として有効です。平成27年度の「鑑賞行為の分析と美術への導入のための鑑賞アプリ開発」講座（山城 大督講師）を発展させ，アート受容について障害者等の弱者に対するアーツ前橋の環境条件に応じた鑑賞プログラム・アプリ等を開発することを目的に講座を開設します。「鑑賞の導入のためのアプリ・Folks」のプロトタイプを発展させ，展覧会のための鑑賞ガイドや鑑賞後のふり返りと交流のためのアプリなど，総合的な完成をめざします。障害者を含めたさまざまな鑑賞者が独力で使用できる音声・映像館内案内・マップ（デジタル）及び鑑賞サポータがそれを使用するための対応マニュアルなど，美術館での鑑賞学習へのアクセスをサポートすることを講師と一緒に考えていく。講座では実際にアーツ前橋の現場で，インクルーシブデザインワークショップを実施し，リサーチ，プロトタイプ，テストを繰り返し，評価まで実施します。

※講師，内容は変更でありますのでご了承ください。講座では写真やビデオ撮影いたしますので，ご了解の上でご参加ください。

4 5	(アーティスト) ◇第１回　講座準備のためのリサーチ① 山城 大督(アーティスト)，ほか ・前年度作成した鑑賞体験アプリ folks をどのように発展させるか，リサーチを実施する。
6 7	◇第２～３回　講座準備のためのリサーチ② 山城 大督(アーティスト)，ほか ・今年度の鑑賞アプリのコンセプトづくりと機能の検証のための，リサーチを実施する。
8.14 (sun)	○講座１：講義とワークショップ「多様な人のための美術館における美術鑑賞で気をつけること」(仮) 八巻 香澄(東京都庭園美術館)，山城 大督(アーティスト)
10.8 (sat)	○講座２：講義とワークショップ「メディアとしての鑑賞アプリ」(仮) 会田 大也（ミュージアムエデュケーター），山城 大督(アーティスト)，ほか
11.12 (sat) 11.26 -27 (sat・sun)	○講座３：講義とワークショップ「美術鑑賞の面白さと鑑賞アプリ」(仮) 伊藤 ガビン(女子美術大学)，山城 大督(アーティスト)，ほか ○講座４：インクルーシブワークショップ「多様な人のための美術鑑賞インクルーシブワークショップ」(仮)(特別講座２日間) Julia Cassim(京都工芸繊維大学)，Lila Cassim（東京大学先端研究センター），山城 大督(アーティスト)，ほか
12	○講座５：講義と演習「鑑賞アプリの製作」(仮) 山城 大督(アーティスト)，中西 要介(デザイナー)，ほか
1	○講座６：講義と演習「鑑賞アプリの製作」(仮) 山城 大督(アーティスト)，中西 要介(デザイナー)，ほか
2	○講座７：講義と演習「鑑賞アプリの製作」(仮) 山城 大督(アーティスト)，中西 要介(デザイナー)，ほか

山城 大督(やましろだいすけ)
美術家／映像ディレクター
1983年大阪生まれ，映像メディアを用い，その場でしか体験できない《時間》を作品として展開する。アートユニットNadegata Instant Partyを結成し，全国各地の美術館，芸術祭でプロジェクトを発表。山口情報芸術センター[YCAM]にてエデュケーターとして，オリジナルワークショップの開発・実施や，教育普及プログラムのプロデュースを担当。「東京映像芸術実験室」を展開し，企画内で制作発表した作品《VIDERE DECK／イデア・デッキ》(2013)が第18回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品を受賞。明治学院大学・京都造形芸術大学非常勤講師。

八巻 香澄(やまきかすみ)
東京都庭園美術館学芸員
1978年福島県生まれ。東京大学美学藝術学専修課程卒業。ミュージアムマネジメントの各種リサーチや展覧会実務などの経験を経て，2006年より現職。展覧会企画とラーニング・プログラムを担当し，来館者の美術館体験をより能動的にするデザインを模索している。主な担当展覧会に「ステッチ・バイ・ステッチ」(2009年)，「内藤礼　信の感情」(2014年)。「こどもとファッション」(2016年)など。

会田 大也(あいだだいや)
ミュージアムエデュケーター／東京大学GCL育成プログラム特任助教
ミュージアムエデュケーター。2003年から2013年まで，山口情報芸術センター[YCAM]エデュケーターとしてオリジナルワークショップや教育普及活動の開発や運営，子供向け展覧会のプロデュースに携わる。YCAMにおける活動で文化庁メディア芸術祭，グッドデザイン賞，キッズデザイン賞などの各賞を受賞。2014年より現職。

伊藤 ガビン(いとうがびん)
女子美術大学短期大学部造形学科教授／編集者・映像作家
1963年神奈川県生まれ。パソコン雑誌LOGINの編集者を経て，ポストーク社を設立。編集以外に，ゲーム制作、映像制作，ウェブディレクション，などを手掛ける。またデザインユニットNNNNYの主要メンバーでもある。
代表的な仕事に『パラッパラッパー』(SCE)のシナリオ，REDBULL MUSIC ACADEMY TOKYOのクリエイティブディレクションなどがある。

Julia CASSIM(ジュリア・カセム)
京都工芸繊維大学特任教授
ロイヤルカレッジ・オブ・アート，ヘレンハムリンセンター・フォー・デザイン客員上席研究員。マンチェスター芸術デザイン大学，東京藝術大学院研究員。ニューカッスル大学より博士号取得。1984-98年ジャパンタイムズ紙のアートコラムニストとして勤務。イギリスに帰国後，2000年にヘレンハムリンセンターに入り，インクルーシブデザインに関する技術・知識の共有を目的としたチャレンジワークショップを企画・運営する。
2010年「デザインの世界に最も影響を与えた50人」に選ばれ

Laila CASSIM(ライラ・カセム)
グラフィックデザイナー。東京大学先端科学技術研究センター特任助教。社会から取り残されたグループのエンパワメントにインクルーシブデザインのプロセスと視覚伝達デザインのスキルを融合させ，研究と作品制作に取り組んでいる。主な活動として足立区の障がい福祉施設におけるアートを活用した，利用者の社会参加と経済自立につながる支援活動の他，東京大学先端研における突出した能力がある小・中学校生の継続的な学習保障及び生活のサポートを提供するプログラム「異才発掘プロジェクト ROCKET 」など。http://rocket.tokyo.jp

その他の講師：
中西 要介(デザイナー)，ほか。
※講師は予定です。

受講生・スタッフインタビュー

平成 27 年度の実践講座の受講生は学生，教員，会社員，公務員，行政職員，アーツ前橋サポーターなど，さまざまな方々が受講していました。全受講生は 43 人，その内 38 人に修了証書が授与されました。
ＡＢＣコースの受講生とスタッフの声を紹介します。

01

笠井 遼一さん
福祉系学生

普段学校では福祉系の勉強をしていて，美術などの知識がまったくなく，毎回聞く話のすべてがはじめて聞く内容ばかりで講座についていくだけでも大変でしたが，話を聞いていく中で少しずつアートの面白さを知り，徐々に引き込まれていきました。特に講座の中でも，ワークショップを自分で企画・実践する回が，勉強になりました。ワークショップを企画することの難しさや実際に行う場面での参加者や環境への配慮，その場でどんな対応ができるのか即興性の重要さを身にしみて学ぶことができました。

この講座を受講する以前はアートや美術に対して興味はなく，学校の授業のようなイメージを持っていたのであまり好きではなかったですが，今回の活動を通してさまざまな作品や人とかかわる機会ができ，今まで持っていたイメージが一掃され興味を持つようになり，自分自身のことについて改めて見つめ直すいい機会にもなり，とても充実した 1 年をこの講座のおかげで過ごすことができました。

02

茂木克浩さん
美術教員

自分が学校現場で行っている授業。その授業をより充実させるためのヒントを得られないかと考え，今回の講座に参加しました。今回の講座で中心となって学んだ，ワークショップの技法は，普段私が務める学校現場で行われている学びの方法とは大きく違った方法でした。活動の目標，評価の観点やその方法などの違いだけでなく，活動の流れやその中にある学びの機会も学校の授業とは違いがありました。この経験を生かし，学校現場で行われている授業を見直し，この学びの方法を積極的に取り入れていきたいと感じました。

また今回は，ワークショップについて学べただけでなく，様々な世代やフィールドの人達 (人材) と出会うことで，人との繋がりという大きな財産を得ることができました。同じコースをとった受講者の中には，講座終了後も自主的にワークショップの活動に参加している方もいるなど，今回の講座は人材育成としての役割をしっかり果たしたものであったと思います。私も，この講座でできた人との繋がりをいかし，自分のフィールド内外で活動していきたいと考えています。

03

羽鳥麻依子さん
美術系学生

本講座に参加したきっかけは，何か面白いものが学べるのではないか，という些細な好奇心からでした。大学の授業の都合で何度か欠席をしてしまいましたが，大学内では学べないことを体験的に楽しく学ぶことができた為，参加出来て本当によかったと感じております。
「地域のために自分が出来ること」について考えたことは初めてでした。講義を聞き，話し合いを行う中で，地域のよさを再発見できたり，自分にも出来ることがあることに気づいたりすることができました。

そして，人と人との出会いや，つながりの場づくり，驚きの演出など，「アート」の多様な可能性を発見することができました。また，課題が発生したときは受講生同士で支えあいながら解決してくことができたので，講座全体を通して人のつながりの温かさを感じました。本講座ではアート・食・電車のコラボレーションという貴重な体験をさせて頂き，その過程で様々な事を学べたと実感しています。今年度学んだことを今度は自分の学習に生かしていきたいです。

04

横山 知美さん
地方公務員

心の伸びしろが広がり，人に対してより寛容的になれました。というのも，「アート＝表現する」だけでなく，「他者との違いを認め合い」「諸問題を解決へと導く」「対話的」なものであるということを基礎講座で学び，それを念頭に置いて実践するように努めたからです。
そのお陰で，仕事や家庭，ボランティア活動でもアート的マインドで過ごすようになったので，人に対するストレスが減って良い循環が芽生えて来ています。

そして，長期に渡ってアーティストの皆さんと一緒に活動していく中で，アートマネジメントに必要な力とは，特別な能力というよりも常識的で皆と調和を取りつつも成し遂げようとする不屈の心を持ち，当初と違ってもその良さを見出し楽しめる力のように感じました。
今後は受講して培ったものを仕事やアーツ前橋のサポーター活動など様々な場面で生かしていきたいです。

05

岩田ちひろさん
事務職

美術が好きで，展覧会を観るだけでなく何らかの形で参加をしたい，と思い講座の受講を希望しました。この講座を通して，今までよく知らなかったアートマネジメントやアートプロジェクトについて知ることができ，理解をするきっかけを得ることができたと思います。なかでも，同じ受講者の中にもアートプロジェクトといえるような芸術文化活動をしている人が沢山いるということは，私にとっては驚きでした。芸術は，自分が想像していたよりももっと身近なところに存在するものなのだと感じました。

Ｃコースでは，鑑賞についてのリサーチや長時間に及ぶ話し合いのなかで，子供・親子連れ・学生そして高齢者など，自分が今まで美術館を利用する中では考え及ばなかった様々な立場からの美術館利用について考えることができました。
他にも沢山の気づきや発見があり，私にとってはとても楽しく，そして有意義な講座となりました。今回得た経験を，自分の活動に活かしたり，周囲に広めたりできたらと思います。

06

小出 和彦さん
劇作家／演出家

美術館の鑑賞アプリを開発する研修に参加しました。アプリ開発というと理系の技術職のイメージですが，参加者は美術教育系の学生や教員，学芸員，美術館ボランティアなどです。研修はまず技術的なことから離れ，全員で情報収集とブレスト，議論を重ねながらアプリのコンセプトを確立するもので，紆余曲折を恐れず模索していくゆるさと濃密さはそれ自体が同意形成のワークショップのようでした。鑑賞を準備するものとは何か，そもそも鑑賞は手段だから，その中身は目的によって違ってきます。

美術知識を学ぶ鑑賞には作品情報を提供するガイドアプリ，同意形成やコミュニケーション教育の支援なら SNS アプリが考えられます。今回は鑑賞前によりフラットな身体 / 感覚を準備する鑑賞ウォーミングアップツールが選ばれました。参加体験型演劇のようなこのアプリの体験会では予想以上の参加者とその意見が集まり，自分たちの街に美術を通して何ができるかというところに第一歩を踏み込めました。

07

宮川 紗織さん
事務局

私は B コースを担当しました。今まで関わってきたプロジェクトは大学生のみでしたが，今回は社会人も交えた，住む地域・年齢も異なるメンバー構成でした。価値観の差を埋めたり，情報共有をしたりすることがここまで大変になると想像もしていなく，文字だけのやり取りと直接会うことのメリットとデメリットを痛感しました。受講生から「どうすればいいの？何をするの？」と聞かれた際にすぐに答えず，相手に考えさせたり，遠回りをさせたりすることでより深い学びになることに気付くことができました。

また受講生は，フィールドワークを精力的に行ったことで，その土地を見つめ直し，さらなる出会いとつながりを深め，他者に発信する力を身に付けました。さらに，食 × アートは人と人を結びつなげるツール，メッセージを伝える手段でもあることを学びました。上毛電鉄ごちそうアートトレインを契機に築いた地元のネットワークをこれからさらに広く深くしていければいいなと思っています。

08

小田久美子さん
アーツ前橋学芸員

アーツ前橋の学芸員として，主にＢコース (上毛電鉄ごちそうアートトレイン）に関わりました。本講座には普段からアーツ前橋のサポーターとして活動している方以外にも，学生の方や社会人の方などこれまでアーツ前橋と接点がなかった方々が集いました。経験も関心も違うバラエティに富んだ人たちと協働するだけでも意思疎通や対話が必要なのに，そこにアートというそれ自体が「アートって何？」という問いを抱えたものと伴走する。成果に喜びを感じる一方で，どうしたら良いのかわからず立ち止まり，不安を抱えたことも多かったのではないかと思います。スタッフである立場からすると，そうした不安や喜びを分かち合える人々の輪がこの講座を通して広がっていることが，何よりも心強いです。各々がもっている力が，他の人やアートとかけ合わさることで増大し，地域に広がっていくようなイメージをもっています。今後も，一緒に汗をかきながら活動できるのを楽しみにしています。

■平成 28 年度 文化庁 大学を活用した文化芸術推進事業
“美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成プログラムの構築と実施・評価”
「アーツでまなび アートでつなぐ！まえばしアートスクール計画@群大 × アーツ前橋」
2016 年 5 月 14 日（土）～2017 年 3 月 31 日（金）
発行：群馬大学茂木一司研究室：群馬県前橋市荒牧町 4-2　tel＆fax: 027-220-7353　email:gundaiart2015@gmail.com
アーツ前橋：群馬県前橋市千代田町 5-1-16　tel:027-230-1144　fax:027-232-2016
発行日：平成 28 年 6 月 10 日　編集・デザイン・発行人：茂木 一司　印刷：上武印刷株式会社

主催：国立大学法人群馬大学
共催：前橋市
助成：平成 28 年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」
後援：群馬県教育委員会，前橋市教育委員会，朝日新聞前橋総局，産経新聞前橋支局，上毛新聞社，東京新聞前橋支局，毎日新聞前橋支局，読売新聞前橋支局，共同通信社前橋支局，時事通信社前橋支局，群馬テレビ，株式会社 エフエム群馬，まえばしＣＩＴＹエフエム，ラジオ高崎